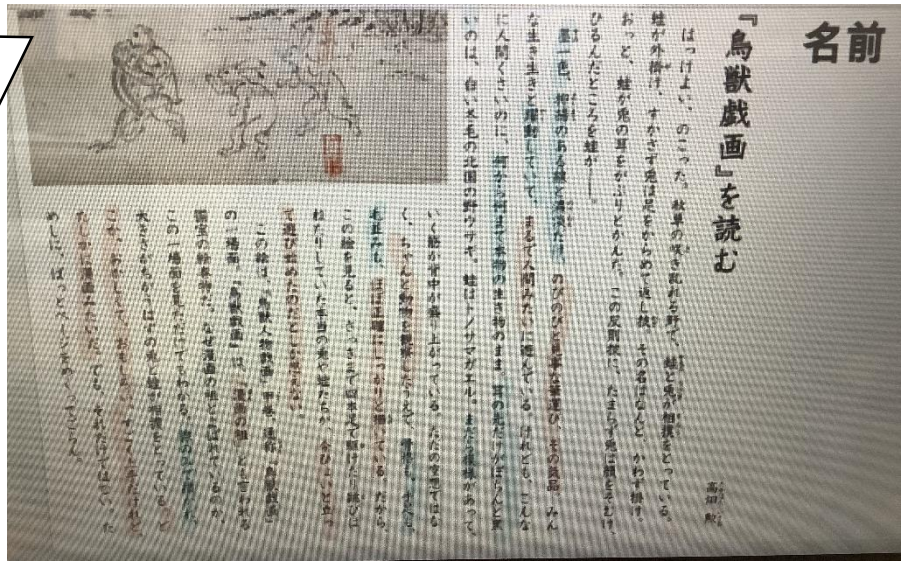
【学習過程の工夫】の手だて

## 視点を明確にして相互評価し、推敲する

６年　鳥獣戯画を読む　浮世絵の解説者になろう！

- 単元のゴールを「クラスで浮世絵の解説発表会を行うこと」と設定した。浮世絵を読み取ったり、詳しく調べたりして、解説文を作成し、発表会を行う流れで単元の学習を進めた。
- 「鳥獣戯画を読む」から、筆者の着眼点や評価の言葉を学び、自分たちでも使える言葉をまとめてから、解説文を書けるようにした。
- ウェビングマップを活用し、様々な視点から絵画の特徴やよさを見付けられるようにした。
- 発表会に向けて、色鉛筆で視点をもって解説文を相互に評価し合う推敲活動を設定した。
- 何度も書き直しをする必要がないように、評価を直接書き込むことができるワークシートを作成した。

Jamboradを活用し、叙述に対して、着眼点が分かる言葉に青色マーカーを、評価の言葉に赤色マーカーを書き入れた。リアルタイムで友達のマーカーと比較し、話し合うことで、それぞれの言葉の使い方に対する理解を深めた。


名前

『鳥獣戯画』を読む

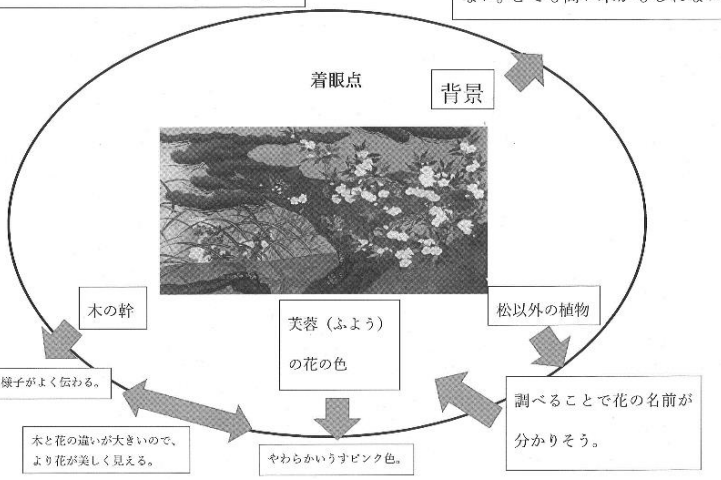
大きさ、色、形など、それぞれの着眼点に対する語彙を増やすために、クラスで言葉を集め、表現方法ごとに仲間分けを行った。使える語彙を増やすことで、絵画を評価するためにぴったりと合った表現を活用し、解説文の表現力を高めた。

思考ツールのウェビングマップを改良し、中心に解説したい絵画を置いて、様々な着眼点から絵画を評価するためのワークシートを作成した。そのワークシートに記入したモデルを児童に提示した。

「日本画の解説者になろう！」評価シート
作品名「松に秋草図」　作者名「長谷川等伯」
名前（　　）

評価

雲のような形があり、上の部分が見えないので、木の高さが分からない。とても高い木かもしれない。




※推敲前の文章ですが、表現の工夫、構成の工夫を意識できている解説文。

「浮世絵の解説者になろう！」　名前（　　）

選んだ作品（牡丹に蝶　　）

いつまできれいに咲いているのだろうか。ただ単に花と鳥を描いているのではなく、自然の中にある風が空気感まで表現している。

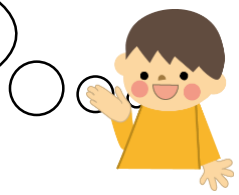
作者は、菖蒲、北斎。北斎は新しい追求と想像力のもとに生み出された作品は、西洋の画家たちに大きなえいきょうを与え、今なお世界で最も有名な日本人画家の一人。

作品は「牡丹に蝶」という作品で、風になびく牡丹に蝶が止まろうとしたそのしゅんかんをとらえた作品です。また写真がない当時において、北斎の描写力が知れる作品です。

まずは、「牡丹」を見てみよう。花びらの内側はローズピンクで外側はさくらピンクの色になっていてグラデーションみたいになっている。また、花一枚一枚にすじが入っていて本物の牡丹により近い色合いなどを使って表現している。

次に、「葉と蝶」を見てみよう。葉には裏と表で色がちがい、牡丹と一緒で葉にもすじが入っていて本物の葉を表現している。蝶には茶色、白、黒などの色を使っていて目みたいな模様もある。

風にゆられる牡丹に止まろうとした蝶を見ると、牡丹のにおいにゆられて蝶がよってきたのかなと感じる。

もっと細かく見れば見るほど、牡丹や蝶の良さがたくさん出てくる。みなさんも、浮世絵にもっときょうさを持ってみればどうでしょうか。

同じ絵画を選んだ友達と、自分とは違う絵画を選んだ友達、それぞれの友達と交流することで、絵画を読み取る着眼点が増え、たくさんの視点で絵画を評価することができた。